

教員活動状況報告書

提出日：令和 6 年 2 月 19 日

所 属： 獣医 学部 獣医 学科

氏 名：石田大歩 職位：助教

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

我が国における家畜伝染病の蔓延予防に資する人材を育成することを責務と考えている。そのために、家畜や家禽の伝染病の病原体や発生状況、診断方法、予防方法について正しい知識を身に付け、基本的な衛生観念を習得するとともに、獣医師としての使命を自覚出来るような教育を実施している。

科目名	学科・専攻	必，選， 自	配当年次	受講者数
牧場実習	獣医学科	必修	2	149
家畜衛生学Ⅱ	獣医学科	必修	4	149
家畜衛生学実習	獣医学科	必修	4	149
家畜伝染病学Ⅰ	獣医学科	必修	4	149
家畜伝染病学Ⅱ	獣医学科	必修	4	149
家禽疾病学	獣医学科	必修	4	149
家畜伝染病学実習	獣医学科	必修	5	133
獣医学特論Ⅰ	獣医学科	必修	5	7
獣医学特論Ⅱ	獣医学科	必修	6	8
卒業論文	獣医学科	必修	6	8
動物衛生学	動物応用科学科	必修	4	125

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

1992年に我が国における豚熱の清浄化宣言がなされてから30年が経ち、遺憾なことに再び豚熱が発生、猛威を振るい、再清浄化には数十年はかかると言われている。またかつては、一生涯に一回対応するかしないかという程度の発生頻度であった高病原性鳥インフルエンザウイルスも、今では毎シーズン発生が見られている。このような経緯から、数十年単位で我が国における家畜伝染病の蔓延防止を担うための新しい獣医師の育成が獣医大学には求められており、これらの問題に対して問題意識を持ち、獣医師としての使命を実感出来る学生を育てることを理想とする。そこで、このような教育の要でもある家畜伝染

病学や家禽疾病学を通して、現場で求められている獣医師像を共有すると共に、若い獣医師が家畜伝染病の蔓延防止に奮戦しなければ、我が国の畜産の将来が危ういということを実感してもらえらるような教育を実施していきたいと考えている。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

これまでの教育において、まずなにより、学生が日本で問題となっている家畜伝染病の状況について把握し、いかにこの学問を学び、これらの家畜伝染病についての知識を身に着けることが重要かを理解してもらうために、現状の発生状況と被害の大きさについて説明することを心掛けている。また、家畜伝染病の診断や予防のために必要な、病理学などの関連科目と絡めながら解説することで、国家試験や将来現場で役に立つ応用力を見つけていくことが出来る教育に重きを置いている。

獣医学だけではなく、学問において、最も優先すべきことは、どのような形であれ学生が勉学に向き合い、理解し、知識を覚えてくれることである。そのため、私の講義では、例えば病原体の学名の由来を解説し、臨床所見の画像を多用することで、イメージと用語をリンクさせ、記憶として定着させるための材料を提供することを心掛けている。

実習や卒論研究の指導においては、まずなによりも、学生の安全を考え、学生自身が病原体を取り扱う上で、自分や周りの身を守るための基本的な考え方や行動を理解するための指導を心掛けており、この点においては、しつこいほど厳しい注意喚起を行っている。その上で、実習や実験における失敗は咎めず、一緒にトラブルシューティングを行い、良い結果が出れば共に喜び合うことで、学生に学問や研究の楽しさを実感してもらい、自らの能力を向上させていく意欲を育んでいくことに重点をおいている。

アクティブラーニングについての取組

- ・毎回の授業で小テストを実施し、学生自身が理解度を把握できるようにする。
- ・実習では出席を取る際に、個別の口頭試問を行い、実施した手技の手順や注意点を自分の言葉で説明させることで、記憶の定着及び言語化の訓練を行っている。

ICTの教育への活用

- ・試験やレポートの提出に学理を利用する。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

①教育（授業，実習）の創意工夫（B）

教育の相違工夫においては、学生が理解し、記憶に定着しやすいように心がけており、学生からの評判も良い。しかし、現場経験の話などは手薄な印象を自身で持っているため、実際に現場経験のある先生方から話を聞き、それらを授業に落とし込んでいきたい。

②学生の理解度の把握（B）

小テストやレポートを通じて理解度の把握を行っている。

③学生の自学自習を促すための工夫 (B)

実習では、事前に予習用講義動画をアップロードし、学生が予習復習を行えるようにしている。

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等) (A)

学生からの質問は随時受け付けており、メールでも対面でも時間を取り、丁寧な対応を心掛けている。今後も気楽に質問をしてもらうために声掛けを実施していく。

⑤双方向授業への工夫 (C)

獣医学分野の科目は記憶してもらう知識の分量が多く、無暗に双方向授業を展開してしまうと、解説に必要な時間が不足してしまう。実習では、各自が操作をしている時や出欠時に学生からの意見や感想を積極的に聴取するように心がけている。

※A (十分実施している) B (実施しているが十分でない) C (うまく取り組めていない)

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。(V 学科, M 学科の教員の方のみ記載してください。)

直近 10 年間の過去問題を調査し、出題傾向を学生に提示するとともに、必須問題、A、B、C、D 問題それぞれの解き方のコツを解説した。特に伝染病学では、疾病名、病原体名、臨床所見や診断方法など様々な観点を対象にした問題が出題されるため、それぞれの項目における類似点や相違点を明確化させて解説した。

5. 学生授業評価

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

コーディネーターを担当するようになったのは本年度からであり、反映させる授業評価がなかった。本年度分の授業評価もまだ集計されていないため、次年度の具体的改善項目は集計される授業評価に沿って検討する。

②①の結果はどうでしたか。

③②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

6. 学生の学修成果

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

良い勉学の基本は反復学習だと考えているため、授業内での反芻は勿論、予習や復習項目を課すことで反復回数を増やしていきたい。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

現時点では得られていない。今後は学生の研究が学会等に応募出来るよう指導に取り組んでいく。

7. 指導力向上のための取組 (FD 研究会参加状況)

FD 研修の参加は義務だと捉えているので基本的に参加している。

8. 今後の目標 (理念の実現に向かう今後のマイルストーン)

短期的には、国家試験合格率向上を目標に、試験対策力のより強い教育にアップデートしていきたいと考えている。また長期的には、当該科目に限らず分野横断的協力を伴った教育を展開すると共に、我が国の家畜伝染病対策に奮戦する獣医師を多数輩出する教育に取り組んでいきたい。

9. 添付資料 (根拠資料) (※) 資料名のみ

なし